

【Notes and Communications】

カール・ポランニー研究の新地平と課題

——Gareth Dale の 3 冊の書籍を読んで——

若 森 みどり

1988年にカール・ポランニー政治経済研究所がモンテリオールのコンコーディア大学に設立されて以来、研究所所蔵の各種草稿や講義録、研究計画、書簡などの未公開資料に基づくポランニーの思想的・理論的研究が、カリ・ポランニー＝レヴィットやマーガレット・メンデルの主導下で活性化された。21世紀になると、『大転換』や晩年の経済人類学に焦点を当てた従来の研究を超える、ウィーン時代やイギリス時代における思想形成にまで踏み込んだ彼の全体像を明らかにする一連の研究が現れた。その代表的なものは、ミケレ・カンジャンニとカリ・ポランニー＝レヴィットとクラウス・トマスベルガーが主として編集作業を行ったカール・ポランニーの『大転換年代記』全3巻（Karl Polanyi. *Chronik der großen Transformation. Artikel und Aufsätze 1920–1947*, Bd. 1–3, Marburg: Metropolis, 2002, 2003, 2005）であり、その解説として書かれた編者による長大な3論文（「市場社会と人間の自由」など）、デールの『カール・ポランニー—市場の限界』（Gareth Dale, *Karl Polanyi: The Limits of the Market*, Cambridge: Polity Press, 2010）、ブロックとソマーズの『市場原理主義の力—カール・ポランニーの批判』（Fred Block and Margaret Somers, *The Power of Market Fundamentalism: Karl Polanyi's Critique*. Mass.: Harvard University Press, 2014）などである。そして、以下で紹介するように、デールが2016年に刊行した3冊の書籍（そのうち1冊は、彼が編集したポランニーのハンガリー論集）によって、ポランニー研究はよりいっそう新しい局面を迎えることになった。

- [1] Gareth Dale., 2016a. *Karl Polanyi: A Life on the Left*. New York: Columbia University Press.
- [2] Gareth Dale., 2016b. *Reconstructing Karl Polanyi: Excavation and Critique*. London: Pluto Press.
- [3] Gareth Dale., ed. 2016c. *Karl Polanyi: The Hungarian Writings*. Manchester: Manchester University Press.

I 『カール・ポランニー伝』 [1] の紹介と特徴

カール・ポランニー(1886–1964)の生涯は、ハンガリー時代(1886–1919)、ウィーン時代(1919–1933)、イギリス時代(1933–1947)、北アメリカ時代(1947–1964)の4つの時期に区分するこ

とができる。これまでのところ、この4つの時期を通じたポランニーの思想的・理論的变化を簡潔に概観した研究は、ポランニー=レヴィットとメンデルによる1987年の共同論文「カール・ポランニー—彼の人生と時代」(Karl Polanyi: His Life and Times, *Studies in Political Economy* 22, 1987)のみであった。デールの『カール・ポランニー伝』は、これら4つの時期のそれぞれにおいてポランニーが直面した時代背景と思想的・政治的な課題、およびこれらの課題に挑戦した同時代の社会科学者の諸著作とそれらのポランニーへの影響といった複雑な文脈を説明する手法で、ポランニーの思想と理論の核にあるものがどのように形成されていったかについてを全体的に描き出した、初の本格的なカール・ポランニーについての伝記的研究である。以下、各章の論点と特徴を概観する。

序章では、世紀転換期のブダペストにおける、急速に進行する資本主義化とそれが引き起こす社会の分解や伝統的共同体の破壊に対するロマン主義的反動との衝突のなかで、自由主義思想(経済的自由主義)と共同体主義思想とのジレンマに悩みながら、このジレンマを創造的緊張の源泉として独自の思想を形成していった、カール・ポランニーを含むユダヤ系ハンガリー知識人に共通する特徴が指摘される。

第1章「東西のサロン」では、ポランニーが父ミハイのイギリス的な合理主義的自由主義と母セシルのロシア的な民衆的(ナロードニキ運動の)社会主義との強烈な混成的影響下で育ったこと、活気を失った古典的自由主義に批判的なブダペストの急進的なカウンター・カルチャーには、ルカーチを中心とするロマン主義的な資本主義批判、サボーを中心とするサンディカリズム、ヤーシを指導者とするブルジョア急進派(自由主義的社会主義)という3つの諸潮流があったこと、ポランニーはヤーシの立場に近かったこと、などが展開される。

第2章「戦争の十字架を背負って」では、1908年に法学の博士号を取得したポランニーが、ルカーチや弟のマイケルとともに、同年に設立されたガリレイ・サークルの教育・文化活動に参加し、「宗教と形而上学を拒否する」立場からコント、スペンサー、マッハ、マルクスなどに関する講演会やセミナーを組織したこと、1915年1月から重病で倒れる1917年12月までハンガリー軍に入り、「世界からあらゆる意味を奪ってしまう」戦争の恐怖と惨禍、鬱病やチフスを経験し、苦しみながら新約聖書を読んでキリスト教への信仰を深めたこと、そして、1914年にヤーシによって創設された急進ブルジョア党の書記長として活躍したように、生涯で政治活動にもっとも積極的だったハンガリー時代のポランニーについて描かれている。本章を読むと、当時、ポランニーの政治思想であった自由主義的社会主義が袋小路に陥るなかで、キリスト教への信仰を深めて独自の聖書解釈に至ったことが、彼の新しい出発点になった、ということが分かる。

第3章「赤いウィーンの勝利と悲劇」では、まったくポランニーとは正反対の性格のイロナ・ドゥチンスカとの出会いと結婚、そして、社会的混乱の原因を究明し社会の再統一の方向性を探るといふ、ウィーン時代のポランニーの最大の関心が描かれる。ポランニーは、フェルディナント・テンニースの『共同体と社会』に魅了されて、市場社会の出現(経済領域と政治領域の分離)を社会的混乱の根本原因と考えるようになった。ポランニーが自由主義的社会主義の限界を突破

すべく取り込んだギルド社会主義論は、① 経済領域と政治領域の分離を再統一する社会主義理論（機能的社会理論）、② 労働を商品として売買することの拒絶、③ 生産者自身による産業の統治から成っていた。ポランニーが、社会主義の実現可能性をめぐる「社会主義経済計算論争」において経済計算と情報の問題を倫理的問題と結びつけたことや、ウィーンで自治体権力を握った社会民主党主導の自治体社会主義の成果（特に、幼稚園、図書館、成人教育プログラムなどの文化・教育改革）に関して「帝都ウィーンをほぼ一晩で洗練された労働者階級の文化の世界的に有名な大都市へと」変貌させた、と評価したことなどが、ここで展開されている。

第4章「挑戦と応戦」では、厳しい経済状態にあったイギリス時代のポランニーが、グラント夫妻やマクマリー夫妻の仲介でキリスト教社会主義の運動に参加し、ファシズムの本質を、「労働者を商品生産ロボットにするウルトラ資本主義の構築」と認識するに至ったこと（『キリスト教と社会革命』（1935）に収録された論文「ファシズムの本質」）が書かれている。また、1930年代半ばのポランニーの知的環境の中心を形成したのは、当時、自由主義神学と社会主義思想との出会いの場であったオックスフォード大学のベリオール・カレッジでの、古典的自由主義に疑問を有する研究者たちとの交流であったこと、とりわけ、アーノルド・トインビー・ジュニアの『歴史の研究』における「挑戦と応戦」から、文明のダイナミズムを説明する視点（後に『大転換』の二重運動の概念のモデルとなった）を学んだことが、述べられる。そして、1932年に刊行されたマルクスの初期著作『経済学・哲学草稿』を読んだポランニーは、マルクスの哲学を「キリスト教の伝統と一致しているだけでなく、…その最善なものを体現している」（Dale 2016a, 137）と考えるに至ったこと、さらに、ソヴェトの計画経済やモスクワ裁判の評価をめぐるカールとマイケルが激論し、兄弟の長期にわたる対立と葛藤——文化的冷戦——が始まったことなどが、描かれている。この章は、ポランニーの社会主義や民主主義やマルクス主義を理解するうえで彼のキリスト教認識がいかに重要な、を教えてくれる。

第5章「大変動とその起源」では、ポランニーが1941年から1943年にかけてのアメリカ・ベントン大学滞在中に「生涯もっとも情熱」を注いで執筆した『大転換』が、自由主義的世界秩序の崩壊（ドラッカー、フロム、シュンペーター、E. H. カー）や全体主義の興隆（コルナイ、ボルケナウ）、経済計画の社会学（マンハイム）、大不況の原因（ロビンズ）を探求していた学者たちから多くを学びながら、危機とファシズムの出現との関連をどう理解すべきかといった難問に取り組みつつ編まれていった過程について描かれている。また、1945年の総選挙でアトリー労働党政権が誕生したことでイギリスが社会主義的方向に進むこと、そしてイギリスの労働党とアメリカのニューディール派との連携によって、自由貿易と金本位制にとって代わる戦後の国際経済秩序が形成されていくことに対してポランニーが期待を寄せていた、といった内容が濃密に叙述されており、それらは本書の白眉のひとつになっている。

第6章「不正義と非人道的行為」では、イロナのアメリカ入国申請が拒絶されたことを契機としたポランニー夫妻の葛藤や、ポランニーが、コロンビア大学での一般経済史のセミナー（1947年から1953年まで）や学際的研究プロジェクト（「経済的諸制度の起源」および「制度的成長の

経済的側面])を通じて、多数の若手の人類学者・制度主義経済学者を育てたことについて描かれる。北米時代のポランニーの原始社会や古代社会に関する経済史的・制度主義的研究は、市場社会の衰退と経済の非市場的諸制度（政府、労働組合、大企業、機能的財政）への埋め込みの傾向（混合経済の進展）という当時の歴史的な文脈において、民主的計画化のための政策的手段を発展させるのに役立つような一連の概念（経済計画を市場の要請と調和させる方法）を探ろうとするものだったことが分かる。

第7章「存在の不確かさ」では、がんが見つかり死に向かう節目の年となった1956年から逝去した1964年までのポランニーが描かれている。彼は生涯の終わりに向けて「幸福感」の高まりを経験し、妻イロナとの関係も優しさと信頼に満ちて成熟したものになった。また、冷戦下のCIAの文化政策（とりわけ、1950年にCIAの資金援助を受けて創設された、反共産主義的文化人による「文化自由会議」）をめぐる激しく衝突した弟マイケルとの関係も、「緊張緩和」の段階に達した。ポランニーはパーソンズの社会的行為論の概念的枠組みに魅力を見出して、それを制度改革論として改編することに意欲を燃やした（アメリカの自由主義的知識人が右傾化する際の道標となった『新しいアメリカの右翼』（1955）に寄稿したパーソンズの論文は、ポランニーへの挑戦状であった）。また、1950年代を通じて彼は「自由と技術」に関する本の執筆計画を立て、「生きることの意味」と自由の再定義について考察した。そしてポランニーは、1956年のハンガリー蜂起を、「隠れた他国による支配」というハンガリー（属国）とロシア（宗主国）との関係から生じる政治的・経済的緊張によって説明し、社会主義の精神的再生として位置づけ、その大きな影響力に期待した。

エピローグ「社会主義の失われた世界」では、労働と自然の商品化の破壊的帰結についてのポランニーの診断が新自由主義的資本主義への批判的文脈のなかで再評価され、現代的説得力を持つことが確認される。ここを読むと、ポランニーがその成人期のほとんどを通じて支持していた、イギリス労働党やオーストリア社会民主党の「改良主義的社会主義」——既存の制度の議会主導による漸次的改良によって社会主義的転換をめざす政治思想——の、今では忘れ去られている理論と実践の意義と限界を追体験できる。デールによれば、「近代経済は市場システムを通じて組織される必然性はないし、またそうすべきでもない」というポランニーの「非市場的ユートピア」（ここでのユートピアとは、マンハイムのいう意味でのユートピア）の主張こそが、彼の重要な知的遺産なのである（Dale 2016a, 284）。

II 『カール・ポランニーハンガリー著作集』[3]の特徴と刊行の意義

本書は、デールが研究チームを組んで、主にポランニーのブダペスト時代とウィーン時代の初期に当たる1907年から1923年の間に、ガリレイ・サークルの機関紙『自由思想』と『ウィーン・ハンガリー新聞』で公表された論説、論文、講演、演説などから39のテキストを選び、ハンガリー語から英訳したものである。同書は、第1部「宗教、形而上学、倫理」、第2部「政治思想とイ

デオロギー」, 第3部「世界政治と歴史哲学」, 第4部「ハンガリーの政治」として編成した中心的部分, および, 第5部「往復書簡」——1908年から64年までの18通の手紙(そのうちの6通はルカーチ宛てのものである)——から構成されている。編者のデールは, この著作集を理解するうえで不可欠な, ポランニーと彼の同世代の急進的なユダヤ系知識人に共通する思想的・理論的背景, および時代の課題を明らかにする, 長い序文を冒頭に置いている。本書の刊行によって, ポランニーが33歳まで暮らしたブダペストにおける思想形成の核心部分が初めて明るみになり, 主著『大転換』の思想的起源を追跡する研究は, ついにブダペスト時代にまでさかのぼることになった。

ハンガリーの自由主義は, 資本主義的経済発展のおかげで社会が自動的に進歩するという, 経済的自由主義の理念が疑われ始めた20世紀の初頭に, 危機に陥って分裂した。主流派の自由主義者は, 大土地所有者や教会と妥協して土地改革や選挙制度改革から退却していった。これに対してポランニーを含む主にユダヤ系から成る少数派の自由主義的知識人は, 自由主義の行き詰まりを思想的に批判し, 経済的自由・議会制民主主義・封建制打破を推進する自由主義的社会主義を信奉して, 政治的には, 工場労働者を代表する社会民主党と連携する急進的ブルジョア勢力を形成した。ここで「急進的」とは, ポランニーが「信の政治と不信の政治」(1921)で説明しているように, 個人の精神的・倫理的变化を信じて社会の変化を構想する政治の立場であり, それに対して不信の政治とは, 個人の意識の覚醒を伴わない客観的過程として社会変化を考察する立場(マルクス主義と自由主義)である。自由主義的社会主義は, 信の政治に分類される。ポランニーは『自由思想』に掲載された1910年代初頭の論文, 「信条と軽信」(1911), 「破壊的転換」(1911), 「確信の意味に関する演説」(1913), 「学ばれた教訓」(1913)において, 世紀転換期のハンガリー自由主義の衰退を考察し, その原因を, 物質的進歩が精神的損失を犠牲にしてなされていること, 自由主義が進歩を盲目的に信奉する「政治的運命論」に陥っていること, に求めている。さらに, ポランニーはブルジョアの急進主義の政治的主張を展開した『自由思想』に発表された論説, 「ブルジョアの急進派, 社会主義者, 既成の野党」(1918), 「急進主義の綱領と目標」(1918), 「急進党とブルジョア党」(1918), 「肉体労働と精神労働」(1919)において, 市民と工場労働者との間に出現しつつある「新しい中産階級」(ホワイトカラー, 知識人, 公務員など)が「ブルジョアの急進党」を形成する必然性を, ドイツ歴史学派のシュモラーやゾンバルト, そして自由主義的社会主義者のベルンシュタインの理論を吸収して説明している。

第一次世界大戦の悲惨な結末と戦後のハンガリー革命(アスター革命とベラ・クンの評議会共和国)を経験したポランニーの思想は, 「われわれの世代の使命」(1918)に見られるように, 1918年から23年の間に精神的・宗教的に大きく転換した。そして, 戦争による人類の道徳的崩壊を説明し解明することが, 次の数十年の彼の研究課題になった。ポランニーは, 現代の社会科学に倫理を復帰させることを主張し, 客観的な外的環境が倫理と政治を決定するという見解を批判した。そして, キリスト教と社会主義を結びつけることによる両者の再生を試み, 自分自身をキリスト教社会主義者として定義するようになった。彼は「イエスの復活」(1923)で, 新約聖

書のイエスの革命的使命（平等・自由・人間の連帯の教え）について語っている。また、本書には収録されていないが、1920年代初頭に執筆された「初期キリスト教と共産主義」では、「共同生活を通じて実現される個人のかけがえのない価値」に対する信念がキリスト教と共産主義に共通する、と指摘している（Gareth Dale, *Karl Polanyi: The Limits of the Market*, Polity Press, 2010, 11）。

ポランニーの政治思想は、ウィーン時代（1919-1933）の初期に自由主義的社会主義からギルド社会主義に変化するが、それは、彼が市場経済の社会への破壊的影響を認識し経済的自由主義を批判するようになったからである。ポランニーは1921年から1923年まで『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集に携わり、「ギルド社会主義」（1922）や「ギルドと国家」（1923）などの論説でG. D. H. コールのギルド社会主義の特徴を紹介した。デールによれば、ギルド社会主義は、「議会制民主主義・サンディカリストの労働者自治・ロマン主義的資本主義的批判の総合的産物」であった。ポランニーは、『ウィーン・ハンガリー新聞』に、第一次世界大戦とそれがもたらしたヨーロッパの精神的・政治的危機を診断する一連の諸論考——「新時代」（1922）、「タイタニック報道」（1922）、「民主主義の再生」（1922）など——を執筆した。また、文明の危機の源泉を「人間の技術的力がその道徳的能力を凌駕している」ことに求める、フェビアン主義の小説家であるウェルズの影響を強く受けた論説、「社会主義者ウェルズ」（1922）や「H. G. ウェルズの文明救済論」（1922）を発表した。ポランニーが『オーストリア・エコノミスト』誌の国際問題担当の記者として採用される23年から、彼の本格的なウィーン時代が到来することになる。

III 『カール・ポランニーを再構築する』 [2] の特徴と論点

本書は、ポランニーの思想と理論を20世紀の政治経済の歴史と思想史を通じて描いた『カール・ポランニー伝』と姉妹関係にあり、そこでは詳しく展開できなかった、2つの世界戦争や世界大恐慌、ファシズムの出現、スターリン主義に見られる危機とその原因についての分析や、それらに対する解決策を提示するというイギリスの社会主義者と共通の課題に彼がいかに取り組んだかを、20世紀の思想的・理論的・政治的な文脈のなかで論じている。それゆえ本書は、20世紀の経済思想や政治思想やマルクス主義や社会学に関連する新たな論点を提供する。ポランニーの政治思想や市場経済観、社会主義像、国際関係論、経済人類学の形成過程を時代の論争的な文脈のなかで考察する本書は、彼の思想と理解の全体像を歴史的に理解しようとする知性史のアプローチによる最初の試みである。以下では、本書のなかで筆者が斬新だと感じた論点や視角などについて、章ごとに列挙していく。

デールは序文で、ポランニー研究の現状を「ソフトなポランニー解釈」と「ハードなポランニー解釈」に分類し、この2つの解釈から生まれる異なるポランニー像について指摘する。ソフトな解釈は、市場経済と社会の自己防衛との対抗的二重運動を社会民主主義的に理解し、戦後の高度経済成長（フォーディズム）と福祉国家の時代を、資本主義的市場経済の行き過ぎが制度（手厚い社会保障制度やケインズ主義政策、団体交渉）を通じて抑制・調整されていた、と考える。こ

のソフトなポランニー解釈は、フレッド・ブロックとマーガレット・ソマーズの共著『市場原理主義のカーカール・ポランニーの批判』やレギュラシオン学派のボワイエを含む、現在の多数派の見解である。これに対してハードなポランニー解釈は、団体交渉のようなフォーディズムの制度や福祉国家を、労働や自然の商品化を抑制・調整する制度としては不十分だと認識する。そして、労働と自然の脱商品化を推進して「経済を社会のなかに埋め込む」ことの意味や実践について根源的に問い直し、民主主義的な社会主義をラディカルに志向する。デールによれば、ポランニーの著書・論文や論考、そして未公開の資料のなかに、ハードなポランニー解釈を支持する支持する多くの証拠を確認できる。

第1章「社会学を再構築する」では、ポランニーが4つの社会主義——自由主義的社会主義（ベルンシュタイン、ヤーシ）、キリスト教社会主義、ギルド社会主義、オーストリア・マルクス主義（パウアー、アドラー）——に接近し、またマルクスの『経済学・哲学草稿』や『資本論』を読むことで独自の「社会民主主義」の思想を形成するに至った過程が示される。

第2章「マルクス主義へのポランニーの反発と接近」では、ハンガリー時代には経済決定論として批判し反発していたマルクスとマルクス主義に、ウィーン時代のポランニーが接近したこと、『経済学・哲学草稿』の労働疎外論と『資本論』の商品物象化論を受容しながらも労働価値論と搾取論については拒絶したこと、そして、彼の擬制商品としての労働理解がテニースの『共同体と社会』の影響を受けていること、が指摘されている。

第3章「資本 対 民衆」では、「資本主義と民主主義は両立しない」という社会民主主義的な両大戦間の中心的命題が、当時の政治的文脈のなかで検討される。当時の社会民主主義には、「普通選挙の実施と労働者階級の政治参加によって社会主義に不可避的に到達する」という楽観的なシナリオがあった。この命題やシナリオから着想を得たポランニーは、それらをファシズム分析に応用した。彼は、資本家が支配する経済領域と労働者階級が支配する政治領域との対立の袋小路が、民主主義を犠牲にして資本主義を救済するファシズムのエネルギー源となってゆくプロセスを描いたのだった。デールによれば、第二次世界大戦後はポランニーがファシズム分析に利用した社会民主主義的命題が忘れ去られ、東西冷戦の時代にあっては、資本主義は民主主義を保障する体制として解釈されて、「資本主義と民主主義の両立」が一般的公理として語られるようになってしまった。しかしながら、最近の欧州複合危機に見られるように、ユーロという統一通貨の価値を安定させるというドイツ資本主義の要請が、その他の欧州連合加盟諸国の民主主義と衝突する事態が顕在化しているなかで、近年、たとえば、ヴォルフガング・シュトレックが『時間かせぎの資本主義』（鈴木直訳、みすず書房、2016年）が描いているように、「資本主義と民主主義の対立」というポランニーの命題が再注目されている。すでにデールは、現在の欧州が抱える問題についていくつかの論文を発表しているが、この命題の重要性がまだ十分には認識されていない、と述べている。

第4章「民主的専制—ソヴェト連邦」では、ソヴェト体制（スターリンの一国社会主義路線）に対するポランニーの支持が1930年代と40年代の初頭にピークを迎え、50年代にはかなりトー

ンが下がる。そして50年代のポランニーのロシアへの関心は、「専制政治が民主主義への必要な序曲を形成した（逆に、ある条件が揃えば、民主主義から専制政治へという展開も十分にある）」という、彼の古代ギリシャへの評価と重なっていることが、指摘されている。

第5章「『大転換』を再構築する」では、歴史的で論争的な文脈を概観しながら、『大転換』の自由主義的資本主義（市場社会）の崩壊と1930年代の危機の分析、そのオルタナティブとして出現したファシズム・社会主義・ニューディールについてのポランニーの主張が、同じ諸問題を扱ったハイエクの『隷従への道』（1944）、マンハイムの『変革期における人間と社会』（1940）、ドラッカーの『経済人の終わり』（1939）、ポランニーの弟であるマイケルの『完全雇用と自由貿易』（1945）、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』（1942）などと対比的に描かれている。他の研究者たちの議論や研究をキリスト教社会主義の見方から読み換えることによって、ポランニーが独自の成果（市場経済の拡大と社会の自己防衛の衝突を描く二重運動論、市場経済の構築とその崩壊の分析、崩壊した市場経済を救済、あるいは代替するさまざまな試みの分析）を生み出したことが詳しく説明されており、『大転換』を原典から深く読み解くことに重点を置いてきた従来の研究スタイルを超越している。

第6章「地域主義と欧州統合」では、ポランニーの二重運動の社会的防衛から欧州統合の意義や役割を説明する議論と、『大転換』の金本位制論を用いて、通貨安定のために緊縮政策を強制して加盟国の民衆に苦難を強いる欧州連合の新自由主義的政策を批判する議論が紹介される。すなわち、ポランニーの二重運動の命題と国際金融制度の分析と貨幣観に関する現代性が鋭く指摘される。

第7章「知識人と赤狩り」では、ポランニーがコロンビア大学で客員教授をしていた時期と赤狩り旋風とが重なっていることに注意が向けられ、とりわけ、社会学者パーソンズが『新しい右翼』に寄稿した「アメリカ社会における社会的緊張」という1955年の論文におけるマッカーシズムの説明がアメリカの政治学と社会学とを大きく右に旋回させたということ、および、それに対するポランニーの反応が、描かれている。パーソンズは、ポランニーの二重運動論を応用しつつ、ニューディールのような国家介入主義に対するアメリカの伝統的な自由主義的傾向の反発として、マッカーシズムを説明した。ポランニーはこれに激昂し、それ以降はパーソンズ批判を試みて、社会的緊張に関する対抗的な論文の執筆に挑戦したのだった。

第8章「メソポタミアにおける再分配と市場交換」と第9章「古代ギリシャにおける市場—新制度主義の挑戦」では、ポランニーの経済人類学、とりわけ古代ギリシャのポリス論とメソポタミア王朝による再分配の分析が、ダグラス・ノースたちの新制度主義的な経済史と対比して再検討されており、ポランニーの経済人類学の現代的影響力が示されている。

IV カール・ポランニー研究の新地平と今後の課題

以上、紹介してきたデールによる3冊の書籍は、従来のポランニーを革新するいくつかの視点

を含んでいる。

デールは第1に、ポランニーの政治思想や市場経済観、宗教観（キリスト教理解）、社会哲学（自由論）、社会主義論、国際関係論、経済人類学の形成過程について、当時の歴史的背景や論争的な文脈のなかで考察しており、「思想の理解において歴史的な文脈を重視する」知性史のアプローチによるポランニー研究を、初めて提供した。デールがポランニーの思想形成を理解するうえでとりわけ重視するのは、ポランニーが青年期を過ごした19世紀末から20世紀初頭のブダペストにおける思想地図——自由主義と共同体主義との思想的対立、自由主義の行き詰まりと自由主義者の分裂——と、ユダヤ系知識人が置かれていた「非ユダヤ的ユダヤ人」と形容される境界的で周辺的な立場（東欧のユダヤ人共同体には距離を置き、ハンガリー社会の学術的ポストからも排除される立場）から、進歩と社会的分裂とをもたらす西欧の資本主義を分析する視角である。デールによれば、このような世紀転換期ブダペストの思想的文脈とユダヤ系知識人の独特の立ち位置とのなかに、ポランニーやルカーチ、マンハイム、そして弟のマイケル・ポランニーを置くことによって、彼らの思想と理論の源泉を内在的に理解することができるようになる。デールが当時の論争的文脈として重視するのは、1920年代では、第一次世界大戦の原因と帰結をめぐる西欧文明の危機についての議論、赤いウィーン、社会主義経済計算論争、および、資本主義と民主主義の対立に関する議論、30年代では、世界大恐慌の原因や国際関係の危機、ファシズムの抬頭、再建金本位制や緊縮政策などに関する議論、40年代では、自由主義的資本主義の崩壊とそのオルタナティブをめぐる諸研究（ドラッカーの『経済人の終わり』、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』、マンハイムの『変革期における人間と社会』、弟マイケルの『完全雇用と自由貿易』、そしてハイエクの『隷従への道』など）である。このような20世紀前半の激動の歴史を生きた同世代に共通した文脈のなかでデールは、『大転換』を構想し執筆したポランニーの思想と理論の独自性を浮かび上がらせようとしている。

第2に、デールは、ポランニーの思想的核心にあるものを、彼が独自に解釈したキリスト教（自由・平等・人間の連帯についての教えとしての福音）と社会主義を結びつけることによって到達した、キリスト教社会主義に求めている。第一次世界大戦後のハンガリー時代末期からウィーン時代の初期のあいだ（1918年から23年）に、このような「ポランニーをポランニーたらしめる」思想的転回を経験したのだろう、とデールは指摘している。デールによれば、それ以降のポランニーは、独自のキリスト教社会主義の立場を貫きながら、ウィーン時代の後期とイギリス時代を過ごし、『大転換』の執筆へと向かった。すなわち彼は、初期マルクスの疎外論を吸収することによって、マルクスとマルクス主義をキリスト教の伝統のなかに位置づけることが可能となったイギリス時代において自らの社会主義観を確立し、経済危機とファシズムについての議論に関連させた独自の市場経済観と危機分析といった『大転換』の枠組みを獲得していったのである。

第3に、すでに指摘したように、デールは『カール・ポランニーを再構築する』において、ポランニーの社会主義論に関するソフトな解釈とハードな解釈との対立に注目し、それを現在のポランニー研究における最大の論点として提起している。ソフトな解釈は『大転換』の二重運動を

社会民主主義的に捉え、資本主義の行き過ぎを是正する社会政策につなげて社会の自己防衛運動を理解する。さらに、戦後の長期的な高度経済成長をもたらしたフォーディズムの制度諸形態(団体交渉制度、福祉国家、管理通貨制度など)を、資本主義的市場経済の暴走を抑制・調整する様式(いわば経済を社会に埋め込む様式)として解釈する。このソフトな解釈は、ブロックとソマーズの『市場原理主義のカーカール・ポランニーの批判』を含む、現在のポランニー研究の多数派の見解である。ハードな解釈はこれとは対照的に、労働や自然の商品化の条件を提供してきた福祉国家を批判的に捉え、二重運動を、「資本主義経済の無際限の拡大要求と相互扶助的な社会関係のなかで生きる人びととの根本的矛盾」(2016c, 6)を理論化するポランニーの命題として解釈する。デールの解釈によると、労働・土地・貨幣の完全な脱商品化と資本主義それ自体からの転換として、経済を再び社会のなかに埋め込むことを考察していたポランニー自身は、ハードな解釈の立場に近かった。デールが調査した妻イロナや娘カリの証言によれば、ポランニーは戦後の福祉国家をあまり評価せず、自分の考えが資本主義の改革に限定されることを望んでいなかった。戦後のプレトウッズ体制についてでさえポランニーは否定的で、各国の脱商品化的な経済政策の余地を最大化するような急進的な国際経済秩序を望んでいた。すなわち、「埋め込まれた自由主義」(ジョン・ラギー)のようなソフトな解釈の立場ではなかった。とはいえ、『大転換』の二重運動の説明に、二重運動についてのソフトな解釈とハードな解釈の両方に根拠を与える文章が混在していることも、また事実である。これに関連することになるが、今後のポランニー研究のひとつの中心は、彼の社会主義論の本格的な解明作業であろう。

第4にデールは、『カール・ポランニー伝』の最後の文章で、「非市場的ユートピア」の構想をポランニーの最大の知的遺産として提起している。ポランニーは、市場経済を「社会から切り離された経済」として把握し、人為的に創出された自律的経済領域(市場経済)によって統治される市場社会を、人類史における「逸脱」として批判した。そして、人間の共同体の目的に対する手段として経済が位置づけられてきた人類史上の諸事例——「社会における経済の位置」——を研究しながら、「産業文明を新たな非市場的基礎に移行させる」ためのプロジェクトを構想した。デールはこの構想を、「社会の現実を変えるための集団的行為を鼓舞し得る、先見的で変革的な先導的思想」というマンハイムの意味でのユートピアとして理解し、そのような非市場的ユートピアを擁護したことにポランニーの知的遺産がある、と主張している。だが、その内容や根拠については、デールの3冊の書籍において十分に説明されているとは言い難い。これは、デールが提起した挑発的なポランニー研究の課題と言えるだろう。

(若森みどり：大阪市立大学)